

1 イプシロンの打ち上げ成功(9月14日午後2時)



二度の延期を経て、日本期待の新型国産固体ロケットが12年振りに打ち上げられ、惑星観測用の望遠鏡搭載の衛星「スプリントA」(愛称：ひさき)の分離にも成功した。低コストの新たな基幹ロケットの誕生である。民間小型衛星市場を二分している欧露と堂々と互角な勝負をして、新たな宇宙ビジネスが展開されるものと期待したい。

日本のロケット技術の蓄積と進展を証明し、大型ロケットと小型ロケットの二本建て体制が確立したことにもなり、日本の宇宙開発にも弾みがつこう。

日本のこの技術や体制が安全保障にも十分に役立つよう関係者には努力して頂きたいものである。

2008年5月成立した宇宙基本法においては、安全保障分野での積極的利用を提唱している。1969年の宇宙平和利用決議という呪縛に未だ捉われていないだ

ろうか？

因みに、ロケット名のイプシロンとは、ギリシャ文字の「E」(イプシロン)であり、これは従前のロケットにギリシャ文字のK、λ、Mが使われたのでEを使用した由。

2 シリアの化学兵器廃棄に係る新たな進展

シリアによる化学兵器の反体制派への使用に対し、シリア攻撃を決断した米国に対し、思うように国内外の支持が広がらない中、米露のシリア化学兵器廃棄に係る合意が整った。シリアの化学兵器保有と使用は明白になりつつあり、シリアもこれ以上言い逃れは出来ないと悟ったのだろう。米露合意のポイントは以下の通りである。

- ①シリアは保有する全ての化学兵器の・・・目録を1週間以内に提出
- ②あらゆる施設への完全な査察の承認
- ③11月までに最初の査察、・・・2014年前半に廃棄
- ④不履行がある場合、・・・国連憲章7章に基づく措置

シリアが化学兵器を国際管理下に置き、廃棄に同意したのは、米国による攻撃を回避し、体制存続を図ろうとするものであり、そういう意味においては米国の断固たる意志が奏功したとみるべきだ。米国の威信失墜と一方的に断じるべきではなからう。

問題は、米露合意が完全且つスムーズに履行されるか否かである。色々なトラブルも起きる可能性もある。シリアが隠匿していないという保証を如何にして確認するのも問題だ。善意に頼る訳にはいくまい、今まで保有すらも認めてこなかった国なのだから。

今回のシリア・スキームがうまく機能すれば、北朝鮮にも適用出来るのかも知れない。北朝鮮は固唾を呑んで見守っていよう。